

児童健全育成賞 佳作

地域と繋がる移動児童館 —小さな公立児童センターの挑戦—

愛知県稲沢市

稲沢市立西町さざんか児童センター

児童厚生員 渡辺 宏明

1. はじめに

稲沢市は、人口13万人ほどの濃尾平野のほぼ中央、名古屋市の北西部に位置し、かつては尾張国の政治・文化の中心地として国衛が置かれていた歴史あるまちだ。公立10施設、私立1施設の合計11施設の児童センター・児童館（以下「児童センター」）があり、中学校区に1つの間隔という、非常に恵まれた環境にある。西町さざんか児童センターは、市の中心地に位置していて、近くに市役所、警察署、郵便局がある。私はここに異動して3年目になる。

現在、冬場を除いて月に1回程度、市内の児童センター職員が集まり、公園で移動児童館を行って3年目になる。3年前まで市内にある公立児童センターの活動は館内のみであり、移動児童館まで踏み切れずにいた。今回は児童センター、地域、学校と協力し合い、様々な壁を乗り越え行ってきた移動児童館の活動記録を報告していきたい。

2. 移動児童館実現までの背景と課題

稲沢市では公立の児童センターで0・1・2歳児とその保護者向けの子育て広場（以下「広場」）をそれぞれの年齢で曜日を分けて行っている。令和4年、私が異動してきた年のある時、いつも広場が開催されていない時間帯に来て過ごしている親子と話をする機会があった。その際、保護者から「みんなと一緒の場にはいたい

けれど、子どもが集団行動出来ないのであえて広場に参加していない」という声を聞いた。この時、広場には来ないものの、参加を望む親子もいることに気づかされた。児童センターを訪れたことがない親子の中には、一般利用すらハードルを感じている場合があるかもしれない。「どうすればもっと気軽に親子が集える場を提供出来るのだろうか」と考えた際、私が名古屋市の児童館で勤めていた頃に行っていた移動児童館のことを思い出した。

以前勤めていた児童館では、児童厚生員が遊具を持って地域の公園に出向く移動児童館を行っていた。そこではあえてプログラムを設けず、自然の中で親子が集い、自由に過ごす場を提供していた。このような活動について、児童館ガイドラインの第4章6節「地域の健全育成の環境づくり」の中にも、「地域の児童遊園や公園、子どもが利用できる施設等を活用したり、児童館がない地域に出向いたりして、遊びや児童館で行う文化的活動等の体験の機会を提供するように努めること」と記載されている。

私はガイドラインに沿って、稲沢市の児童センターでも同様の取り組みが出来ないかと考えた。しかし、稲沢市の公立児童センターでは、各施設に職員が2～3人しかおらず、外に出向くのが難しい状況だった。このことを職場で相談すると、「他の施設と協力する方法はどうか」という提案が出た。近隣には2つの児童センターがあり、1つは施設のリニュー

アルでしばらく利用が出来ない為乳幼児親子の集う場を探している状況、もう1つは乳幼児親子の利用促進を考えている状況だった。3つの児童センターで力を合わせ、職員を出し合えば移動児童館を行うことが出来るのではないか。施設長からそれぞれの児童センターに連絡し、趣旨を説明すると「やってみよう」と回答を得ることが出来た。

公園の候補地には、3つの児童センターから比較的近く、自然が豊かで、駐車場も大きい稲沢公園が挙がった。初めての試みの為、児童センターを管轄している子育て支援課に経緯を伝え相談すると、「そもそも親子から多くのニーズがあるのだろうか」という疑問が出された。確かに利用者から口頭での声は聞いていたが、多くの親子に問いかけた訳ではないし、形としては何も残していなかった。早速、現場の声を形として集めるため、移動児童館についてのアンケートを実施予定の3つの児童センターで乳幼児親子に行った。その結果、アンケートに回答した親子のほぼ100%が「公園での行事に参加してみたい」と答えた。さらに、稲沢公園について質問すると、「遊具がないので遊ばせにくい」「遊ばせている人が少ないから行きにくい」という意見が多く寄せられた。この結果から、「外遊びは子どもにとって良いことだと考えているが、遊具がないと遊べない」と思っている保護者が多いことがわかった。子どもにとっては生きていく上で、全てが遊びであり学びとなっていく。稲沢公園は四季折々の自然があり、遊具がなく、走り回ってもぶつかることのないような広い公園の為、「遊具で遊ぶことだけが遊びではない」という気づきが出る場としても最適だと感じた。

アンケート結果を子育て支援課に伝え、再度相談をしたところ、次に「公園の利用申請や保険の対応をどうするか」という新たな課題が挙がった。これらに関しては、まず市の担当課に連絡し、公園申請の手順と書類の提出方法を確認した。保険については、児童健全育成推進財団に現在の契約内容を確認することで解決し

た。

問題をひとつひとつ解決し、ついに移動児童館を寒くなる前の11月に、試験的だが実施することが決まった。しかし、実施は決定したものの、詳細についてはまだ決まっていないことが多かった。流れや内容、具体的な準備物など、決めなければいけないことが山積みで、職員の不安もあった為何度も打ち合わせを行った。移動児童館の名前に関しては「青空の下公園で自由に遊ぶ」というところから、「あおぞらパーク」に決定。対象は、平日の午前中であることから1歳児から2歳児。定員は20組で実施日を2日間設け、2日目は初めての親子を優先。定員を超えた場合は別の日を案内。申込み方法は、申込者の集約の難しさから隣の児童センターである高御堂カトレア児童センターへ電話申込みのみ。当日の雨の他、前日や早朝の雨で足元が濡れている場合も中止。初事業の為、安全に開催することを第一に、手堅く進めていくこととなった。打ち合わせの中で、移動児童館の目的や職員はどのように関わっていくと良いかも改めて確認した。後日、参加予定の職員と共に稲沢公園に下見に行き、見通しが良くトイレ、手洗い場が近い芝生広場のエリアで実施することとした。目印としてテントを立てることにしたが、テントは備品にない為、職員が自前のテントを貸し出ししてくれることになった。テントには目印の看板と危険な箇所を知らせる公園内の地図を作成して掲示し、駐車場から会場までは距離がある為、案内役を配置することにした。遊び道具は、木の実などを転がして遊べるよう紙管を半分にカットしたものやおままごとセット、チョークや落ち葉プール用の枠、シャボン玉液など、自然遊びが展開しやすいものを用意した。

3. 1年目の実施記録と手ごたえ

第1回目の令和4年11月14日(月)の参加者は13組だった。スタッフ4人が場のセッティング、公園内の安全チェック、駐車場誘導に分かれて準備を行い、会場に親子が来たら名

簿で名前を確認していった。開始時間の10時半になると、職員からあおぞらパークの過ごし方と注意事項について説明し、その後は、落ち葉を集めてプールにして遊んだり、木の実でおままごとをしたりと各々が自由に過ごしていた。職員はときに遊びのモデルを見せつつ、子どものやってみたい気持ちを遮らないよう見守り、保護者同士、子ども同士を繋いでいくことを大切に関わっていった。中には、当日知らずに公園に遊びに来た親子もおり、「参加がしたい」とのことだったので名簿に名前を記入して参加してもらった。今回の参加者は子育て広場に参加している親子が多かったが、児童センターで広場に参加していない親子の参加もあった。後日、参加した親子からは「なにもない公園だと思っていたけれど子どもがあんなに遊べると思わなかった」「たくさん人がいたから楽しかった」「次回も参加したい」と言われた。子育て広場に参加出来ていなかった親子からも「自由に過ごせたから参加できて、他の親子とも関わられた」という声があった。テントを立てて実施している様子が珍しかったようで、散歩している方の多くから声をかけていただき、移動児童館や児童センターの話が出来た。会う方々が口々に「いい活動だね」と言ってくださり、肯定的な反応もいただいた。参加した職員からも「自由で親子がのびのび遊んでいた」「開放感がありこちらも楽しかった」という声が多く、あおぞらパークの手応えを感じた。

第2回目の令和4年11月29日(火)は、前日と早朝に雨が降った為、事前の打ち合わせ通り中止とし、参加者には電話連絡をした。参加者に連絡すると残念がる声が多く聞かれ、参加意欲の高さを実感した。雨で流れてしまい1度しか行えていない為、事業として評価するのは難しいということで、12月以降の寒くなる時期を避け、3月にもう一度実施することになった。試験的に行う為、曜日や日程の間隔を変更し、令和5年3月9日(木)と14日(火)に実施することにした。第1回目の反省を踏まえ、遊び場が公園であり、誰もが自由に過

せる敷居の低い場所を目指していることから、当日通りかかった親子もその場で申込みをすれば参加出来るようにし、0歳児の申込みは受け付けしないが、当日様子を見に来てもらう形とした。

第3回目の令和5年3月9日は22組の参加、第4回目の3月14日は第3回目より少ない14組の参加だった。両日とも、当日に偶然公園へ来た親子には参加してもらい、0歳児親子には様子を見ていつてもらった。9日・14日の両日とも、季節の花を探しに散歩したり、川を泳ぐカルガモや亀を見たりする親子が出てきて、第1回目に比べ過ごすエリアが広がっていた。同じ空間にいる為、犬の散歩やウォーキングをしていた方と遊びに来ている親子に自然と会話が生まれ、館内ではない交流も生まれていた。この姿を見て、あおぞらパークが地域の方と親子の繋がるきっかけになるのではないかと感じた。また、プログラムがなく職員がフリーで遊びの中に入っているため、親子・職員どちら側からも声かけやすい環境になっていた。その証拠に、職員の振り返りで「参加した親子と会話も増え、何気ない話が日頃より出来た」という声があった。

回数を重ねて開催してきた為、地域外で広報を見たり、開催日にたまたま稲沢公園に散歩に来ていたりした親子から「うちの地域でもやってほしい」という声が多く届くようになってきた。しかし、市内全域からの募集となれば参加者も増える為、全児童センターが協力して実施する必要がある。その為には、事業の説明と各児童センターの理解が必要不可欠だ。次年度事業を決める施設長会で、あおぞらパークの報告を行い、参加者だけでなく、地域住民からも評価があったことを伝えた。その結果、令和5年度も継続することへの理解を得ることが出来た。さらに、他の地域からも実施を待ち望む声があることから、次年度は市内全域から募集をして全児童センター職員が協力して実施していくこととなった。ただ、市内全域で行うには職員へのレクチャーや準備が必要な

為、5月・6月は令和4年度通り3つの児童センターで行う。この期間に他の職員にも見学に来て様子を見てもらい、9月・10月・11月・3月は市内全域で実施することとした。

継続にあたり、令和5年度の内容について話し合いが行われた。対象年齢については、0歳児の見学を実施してみて「お座りが出来るようになれば過ごせるのではないか」という意見が多かった為、0歳児（お座りが出来る程度から）も参加出来るようにし、それに合わせて定員も30組に増やすこととなった。天候については、令和4年度は雨天中止で実施出来なかった日もある為、予備日も確保し、中止の場合は予備日に実施することにした。散歩に来る地域の方々に対しては、繋がるきっかけを作る為、あおぞらパークの年間日程を作成し、活動のお知らせをしていくこととなった。

あおぞらパークの継続と全地域での開催へ広げていくということで、移動児童館の予算がついた。テント等の備品は今まで職員の持ち出しで行っていたが、専用のテントやコンテナ、キャリーカートを購入することが出来た。施設長会で認められたことと予算がついたことは大きな前進であった。

4. 地域拡大と2年目の挑戦

令和4年度の実施から様々なことを改善した上で、令和5年度のあおぞらパークが始まった。最初である5月のあおぞらパークでは3月に実施したことを覚えている方もおり、17組の参加者があった。予定通り他の児童センター職員にも見学してもらおうと「プログラムがなくて自由度が高いところがいい」という声や、「親子がいきいきとして楽しそうだった」という声をもらった。

6月は当日、予備日の両日も雨の為中止とした。非常に残念な結果となってしまったが、元々前から天候が危ぶまれる予報であったにも関わらず20組以上の親子の申込みがあり、ニーズを感じる事が出来た。

9月になり、いよいよ市内全域での開催と

なった。ここで問題となったのは申込み方法だ。今後市内全域対象になっていくと、今以上に一施設に連絡が集中してしまうことと先着順の為、各児童センターでの申込みの集約にタイムラグが出てしまうことが予想された。これらを避ける為、9月からは市の申込みフォームを利用したインターネットでの申込みを受け付けることにした。インターネットでの申込みは児童センターでは初の試みで、先着順での集約が難しい為、申込みはインターネットのみとし、窓口や電話で尋ねられた場合は、申込み方法や操作方法を説明することとした。

9月にインターネット申込みを始めると、参加者からは「手軽に申込みようになった」との声ももらった。この月は実施日を2日間設けて、どちらかに参加出来るようにすると、21日(木)が20組、28日(木)は34組の参加人数だった。28日は当日参加もあり定員を超えることになったが、問題なく終えることが出来た。すでに芝生にはトンボやバッタも出てきて虫を探して遊ぶ親子も出てきたが、まだかなり暑さがあった。日陰に入ると日は和らぐが蚊が多く、あまりの多さに途中で断念して帰っていく親子もいた。

10月は26日(木)の1日しか日程が取れなかった為、定員を増やし50組とした。それに伴い、駐車場が足りなくなることが予想される為、公園横の保健センターへの駐車場のお願いをすることとした。この日は当日参加も含め42組の参加があったが混乱もなく、それぞれが思い思いの遊びをして過ごすことが出来た。ただ、今回もやはり蚊が多く、事前に児童センターから持ってきた虫除けスプレーをしたが室内用だった為、しばらくすると効果が薄れてしまい蚊対策には課題が残った。

5. 誰もが自由に過ごせる場の創出と地域連携

令和5年度のあおぞらパークを全地域で実施していくことが決まった時、私は市内全域の児童センターが協力するのであれば、乳幼児に

限らず、もっと多くの人達向けの遊び場も作れるのではないかと考えた。しかし、稲沢市の児童センターが屋外で乳児から大人まで誰もが自由に遊べる遊び場をやった前例はない。そんな時、「プレーパークときのわ」の存在を思い出した。「プレーパークときのわ」とは、市民活動団体で、稲沢市の祖父江地区で毎月プレーパーク（冒険遊び場）を行っている団体だ。プレーパークとは、「すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所であり、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識のもと、子どもと地域と共につくり続けていく、屋外の遊び場」（日本冒険遊び場づくり協会HPより抜粋）である。プレーパークときのわ（以下「ときのわ」）には私も息子とよく遊びに行っていたこともあり、そのような遊び場を稲沢公園で一緒に出来ないかと思い、団体に相談してみた。すると、「他のエリアでも考えていたところだった」と前向きな返答をもらうことが出来た。

私は施設長に経緯を伝え、「市内全域で行うならばプレーパークのような遊び場を実現出来るのではないかと」と相談した。さらに「一緒にやってくれる団体もあり、地域との関係が希薄になっている今だからこそ誰もが自由に過ごせる屋外の場所が必要ではないか」と訴えかけると思いが伝わり、施設長会で提案してもらえることになった。施設長会で提案したところ「協力してくれる団体があるならばやってみよう」となり、11月に市内全域の子どもから大人を対象とした「あおぞらプレーパーク」が実施されることとなった。

実施にあたり、令和5年の4月からときのわスタッフと打ち合わせを重ね、日程や必要な物品、準備の分担について話し合った。あおぞらプレーパークもあおぞらパークと同じ場所で実施する為、ときのわスタッフにあおぞらパークの様子を見てもらい、遊び場の状況と当日の環境設定について相談した。工作は子どもがノコギリやハンマー等を使用する為、受け付けの近くで目の届きやすい場所にした。またときのわでは、参加者が使わなくなったものを持ち寄

り、欲しい人にもらっていってもらう「どうぞの会」を毎回行っている。これも受け付け近くで行うこととした。児童センターとして初めての試みの為、運営方法に不安があり道具も不十分であったが、ときのわの協力によりスムーズに進めることが出来た。ときのわは小さな子どもを持つ親のスタッフが多い為、広報や現場対応のスタッフ確保には苦労していた。児童センター側が市内全域に広報をしたり、職員が現場スタッフに加わったりすることは、ときのわとしてもプラスとなり、どちらもWinWinの関係だった。お互い協力し合って実施するという事で、あおぞらプレーパークは稲沢市とときのわの共催事業となった。

打ち合わせの中で、稲沢市内にはいくつか大学があることに着目し、「この機会に大学生との関わりも作りたい」という意見も挙がった。そこで、7月に近隣大学2つにあおぞらプレーパークのサポーター募集ポスターを掲示してもらったところ、合計7人の申込みがあった。申込者には事前にあおぞらプレーパークの活動内容や子どもとの関わり方について説明会を行い、理解を深めてもらった。これまでは順調に進んでいたが、ここで問題が発生した。ある日、他の児童センターから「設定した日にちが学校公開日だった」との相談があり、確認してみると市内の約半分の小学校が学校公開日であることが判明した。さらに、近隣大学でオープンキャンパス、保健センターではイベントが予定されていることがわかり、駐車場の混雑も予想された。子育て支援課、ときのわスタッフと相談した結果、初めての試みであり、市内全域でどれほどの反応があるかわからない為、日程は変更せず実施することとした。広報活動では、学校教育課と急遽、保育課にお願いし学校公開日ではない小学校と市内全域の保育園にチラシを配布させてもらった。駐車場に関しては少し遠くなるが、市役所駐車場と清須保健所稲沢保健分室の駐車場を使用出来るようお願いをした。

11月11日の当日は、小学校の半分が公開日だったにも関わらず、300人を超える参加

者があった。参加者からは「小さい下の子も小学生の上の子もストレスなく遊べる場なのがよかった」「自然の中でいつもよりおらかな気持ちで子どもを見ていることが出来た」という声や、「自然遊びを普段なかなかさせられていないからよかった。毎月やってほしい」「次はいつあるのか」と次回を望む声も多く聞くことが出来た。また、参加した大学生も「久しぶりに子どもと思いきり遊んだ」と楽しんでおり、地域の手伝いに来てくださった方々も子どもと一緒に木工や竹鉄砲を作る姿があり、子どもと大人と一緒に過ごす場となっていた。開催日程や消耗品の準備、役割分担等の反省点はあったが、スタッフからも「令和6年度も継続で実施したい」という声が多く、次年度への意欲が高まった。

6. 令和5年度の成果と次年度の取り組み

冬の期間お休みとし、年が明けた3月14日(木)に令和5年度最後のあおぞらパークが開催された。気候もよく、当日参加も含めると定員を超える52組の参加があった。参加者から「11月に上の子と一緒に遊びに行きました」という声もあり、あおぞらプレーパークを実施した効果が伺えた。

令和5年度は3つの児童センターから全児童センターの職員がスタッフとして関わるようになった。全児童センターに向けて事前説明を行ったものの、初めは「人も時間もない中でなぜわざわざ外でやるのか」といった懸念が職員から出ることもあった。また、「提供する遊びがマンネリ化しないように変えていったほうがよいのではないか」との意見もあった。しかし、実際に活動を見て関わる中で、親子の明るい表情や保護者との程よい距離感、屋外の開放感、プログラムのない自由さを実感することが出来た。また、四季折々の生き物を見たり、触れたりすることによる感動や驚き、暑い時期は水遊び、秋になってきたら木の実拾いや落ち葉遊びと季節ごとに様々な遊びが展開されていった。

環境を整えておくことで、自分たちで遊びを見つけ過ぎていく参加者の姿を見て、職員も見守る大切さを学ぶことが出来た。

多くのスタッフや参加者から「また参加したい」という声をもらった為、令和6年度も5月、6月、9月、10月、3月にあおぞらパークを実施し、11月にはあおぞらプレーパークを引き続き実施することが施設長会で決定した。次年度に向けての話し合いでは「定員を越えても受け入れよう」という声が挙がり、誰でも参加出来るようにしていく為、今後は当日を含め全ての参加者を受け入れていくことに決定した。「そうしてしまうと申込み制にする意味がなくなるのではないか」という意見もあったが、申込みがあることで事前の人数把握に有効であることから申込み自体は継続することとなった。曜日については、職員の調整がしやすいことから木曜日に固定することにした。また、現在まで特定の職員があおぞらパークに関わる全ての準備と申込手続きを行ってきた。しかし、継続していくには全職員が進められるようになる必要がある。その為、令和6年度は今まで行ってきた手順をマニュアル化し毎月担当を決め、担当職員を中心に準備等を進めていくことにした。また、あおぞらパークをより多くの人に知ってもらう為、SNSでの発信を強化し、担当職員が活動の様子をシェアしていくことにした。

7. 3年目の取り組みと工夫

3年目になり、少しずつ職員や参加者も定着し、「毎回楽しみにしている」と言いながら申込みをする親子も増えてきて、令和6年5月のあおぞらパークには47組の申込みがあった。「初めて公園で過ごす」という0歳児親子も多かった為、テント内に0歳児スペースを作ると、親子同士が関わりやすくなり新しい交流が生まれていた。5月は過ごしやすい気候で1・2歳児親子は散歩をしながら芝生の感触や花の香りなど様々な刺激を感じて楽しんでいた。

6月の実施日は、雨が心配されたがなんとか天候も持ち直し実施することが出来た。むしろ

6月にしては異常なほどの暑さとなり、遮光ネットを取り付けて暑さをしのぐほどだった。この日は36組の参加があり、この日は地元のプロスポーツ選手がやってきたので、親子にとって貴重な交流の機会となった。

次は夏場を避けて9月の開催だったが、令和6年度は9月になっても30℃を超える暑さが続いていた。実施日も同様の暑さとなり、テントや遮光ネットを設置しても、強い日差しと地面からの熱気を強く感じるほどだった。その中でも26組の参加があり、水遊びや木の実遊びを楽しんだ。振り返りでは、9月の開催を避けて冬場に開催してはどうかという声も挙がった。参加者からは「真冬でも外で動き回りたい」との声もあり、冬の開催は今後の重要な課題となった。10月には担当職員が書類の手続きだけでなく、役割分担や事前打ち合わせ、当日の遊び場の配置図を用意するようにした。これにより、初めて参加する職員も視覚的に理解しやすくなり、スムーズに活動出来るようになった。また、蚊の発生が懸念されていた為、蚊取り線香等を購入し蚊対策を行った。その効果もあり、当日参加も含め40組の参加があったが、多くの参加者が最後まで遊んで過ごすことが出来た。

11月には令和5年度同様あおぞらプレーパークを実施する予定だ。実施日は前年度の反省を踏まえ、早い段階で各学校の公開日を確認し、重ならない日程をときのわスタッフと相談しながら選定した。前年度中にときのわスタッフと大まかな打ち合わせを済ませていた為、10月には確認事項の打ち合わせを行うだけで、前年度よりスムーズに進めていくことが出来た。人気だった木工の材料調達に関しては、ポンドなどの消耗品は児童センターの予算で購入し、廃材は地域の工芸店や大工から寄付してもらえることになった。また、前年度同様に近隣大学へサポーターを募った。うち1校は令和5年度の実績を踏まえ、令和6年度は授業の一環として学生が参加することになったので、授業以外で関心のある学生向けへのポスター掲示

をお願いした。もう1校も快諾してくださり、ポスター掲示や教員からの呼びかけをしてもらうことになった。

令和5年度と同様に事前説明会も実施した。説明会に来たサポーターの中には「前年度が楽しくてまた応募した」と言ってくれる学生もいた。大学生だけでなく、初めて参加する職員にも聞いてもらい、移動児童館での子どもとの関わり方への理解を深めてもらう機会となった。令和6年度は、近隣大学も保健センターもイベントはない為、保健センター等に駐車場の協力もお願いすることが出来た。チラシの配布は、学校教育課に全小学校へのチラシ配布、保育課へは全保育園に周知と施設内ポスター掲示をお願いした。11月30日のあおぞらプレーパークに向け、現在も地域の様々な団体や機関と連携して準備を進めている。

8. 成果と今後の展望

この取り組みは、まず利用する親子の悩みを聞くところから始まった。その声を施設内の職員と共有し、それがやがて全児童センターの職員へと広がり、地域との連携にも繋がっていった。稲沢市の現状では、移動児童館の実施は困難と考えられていたが、市内の児童センターが力を合わせることで「あおぞらパーク」の実現に至った。さらに、地域の大学や団体との協力により、子どもから大人まで誰もが自由に過ごせる場「あおぞらプレーパーク」も実現出来た。ある親子は、偶然訪れた稲沢公園であおぞらパークに出会い、職員から直接近隣児童センターの話聞いた。それをきっかけに、後日近くの児童センターに来所してくれた。その際「いつも児童センターの前は通っていたけれど、入る勇気がなかった。誘ってもらえて良かった」と感謝の言葉をもらった。こうした出会いは、施設内には得られなかったものだ。地域との関わりも一層深まり、地域で活動する団体や個人と繋がる機会も増えた。また、稲沢市内には複数の大学がありながら、児童センターとの連携はあまり進んでいなかった。しかし、今回

の移動児童館を通じて、大学側にも児童センターの活動を知ってもらう機会が出来、学生が子どもたちと交流する場も提供出来た。

児童センターは自由に過ごすことが出来、何をしても何もしなくても良い場所だ。しかし、建物の中というのは見えにくく、参加することにハードルを感じてしまう人も少なくない。屋外での活動は、参加のハードルを下げ、児童センターを知ってもらうきっかけにもなっていく。児童センターの外での活動を広げていく為には、地域との連携が必要不可欠だ。少人数体制の公立児童センターではマンパワーが不足しがちだ。しかし、今回のように少人数でも工夫を重ね、地域と一体となることで、新たな活動の実現が出来る。今後も地域との連携方法を模索しながら、児童センターが地域に根ざした存在となれるよう、さらに活動を広げていきたいと考えている。